ミサゴ便り

平成 13 年８月８日発行　　弓削野鳥の会編集発行

今年も帰ってきましたアオバズク

５月下旬、昨年初めて松原法王ヶ原で観察できたアオバズクが、また同じ松の木の樹洞に営巣し、子育てに励んでいました。オスのアオバズクは枝に止まり、外敵から雛を守っているようでした。夜になれば必死で餌を巣に運んでいたことでしょう。６月一杯、メスは巣から出ることもなくひたすら子育てに励んでいたようです。７月初めになるとさすがに雛も大きくなったのかメスの姿も見られるようになりました。幹の中間の節目には雛の糞がうず高くつまれていました。

７月１１日２羽の雛も巣立ちの日が近づいたようです。親鳥も教えることはすべて教えたのか、次の日には家族４羽とも姿は見られませんでした。また来年元気な姿で戻ってくることでしょう。

【　アオバズク　】　名前の由来は、木の青葉が出始める５月頃に渡って来るフクロウ（ズク）とのこと、主食は、蛾、カナブン等の昆虫、たまに小鳥を捕らえることもある。(T・M)

知　ら　ぬ　が　仏（part 1）　　平　山　和　昭

おそらく弓削町の人なら誰でも普段から見慣れているスズメとホオジロの違いはわかる。ともかく「違う」とわかることだろう。この違いがわかるということは、消極的ながらでも観察の成果だ。ところが、そういうわかり方では野鳥の識別というにはほど遠い。たとえば、カラス、あるいはツバメ、はたまたトンビ。（どの野鳥でも同じことが言えるのだろうが）毎朝、こうるさいカラスも、軒下をスイスイ飛び回っているツバメも知ってみればその集団は一種類だけではない。カラス：弓削ではハシブトカラス、ハシボソカラスが主だが、もしかしたら、ミヤマカラス、コクマルカラスがまじっていないとも限らない。ミヤマもコクマルも

一見黒いカラスなのだから具体的な特徴を知らなければ「カラスがようけおる」というにとどまってしまう。ミヤマ、コクマルは主に九州

地方に飛来する冬鳥だけど弓削に飛来する可能性はある筈だ。筆者は笠岡の干拓地でコクマルを見た。ツバメ：普通のツバメ、それにコシアカツバメは、巣の作り方がまるで違うからネタを知ってしまえば識別は簡単だ。アマツバメは遠くでしか観察できないけど、三日月型というか鎌のような翼で飛び回る姿がとても印象的だ。トンビ：弓削にはトンビしかいないと思っている人は多いのではなかろうか。かく申す筆者も最近までそうだった。ハヤブサ、ミサゴ、ノスリ、ハイタカ、サシバ、ハチクマ、この６種のタカがトンビと一緒に空を舞っている。図鑑では九州にしかいないとされるツクシガモも、今年の冬、笠岡干拓地の池で見た。鳥には翼があるとはいえ、こういう異変は野鳥にとっては不幸なことなのだろう。ふるさとが棲みにくくなったのかしら？と思う。地域で珍しい野鳥を見分けることができること。バードウォッチングの楽しみはここにある。（to be continued）

夏　の　蚊　学　　椎名誠の「蚊学の書」より

蚊はどんな時に人を刺すか？血を吸うのはメスだけで、オスは花の蜜を吸って生きている。それではなぜメスが血を吸うのか。蚊のオスは寿命がたった８～９日しかなく、生まれてまもなくメスを追いまわして交尾するが、そのあとすぐメスが人や動物の血を吸わないとうま

く妊娠しない。血には鉄分やたんぱく質が含まれており、メスには子孫のためにどうしても必要なのだ。ちなみにメスの蚊は人や動物の血を体重の３～５倍も吸うことができる。

ホ　オ　ジ　ロ　の　食　性　　松　本　敏　和

平成 10 年 12 月 20 日のバードウォッチングでのこと、大谷の清掃センター付近でホオジロが３羽夢中になってススキの実をついばんでいる光景に出会った。以前にも見たことがあるような気になり、記憶をたどると１ヶ月前狩尾でもススキの実を食べていたし、一年前にも同じ姿に出会ったように思う。その後、冬になるとススキの穂を見るとその中にホオジロを探し、たびたびこのような光景を目にする度に、いつのまにか「ホオジロは、ススキの実が大好物だ。」という考え方が私の脳裏に刻み込まれていた。

図鑑で調べると、「繁殖期には昆虫（バッタ、アブラムシ、ガの幼虫、ハエ他）、クモなどの動物質を食すが、秋から冬にかけては、主に草（カヤツリグサ、ススキ、タデ等）の実を食す。」とあり、好物の虫が少ないから草の実を食べている

に過ぎず好んで食べているのではないそうだ。しかし、弓削のホオジロは、ススキの実を食すことは事実であり、こんな思い違いを大発見のように思い込むのもバードウォッチングの面白さの一面かもしれない。

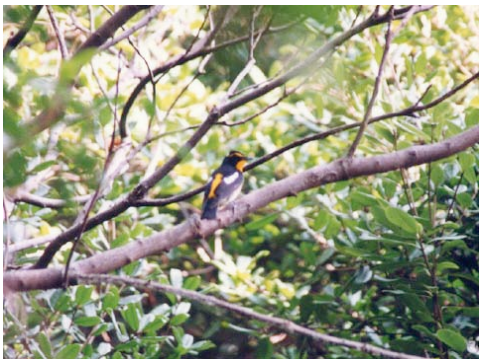
ホオジロは好んでススキの実を食べないにせよ、寒い時期に白いススキの穂に包まれ、実を食す茶褐色のホオジロの姿は、実にあったかそうだし、私の心までほのぼのと温めてくれる。

見つけたぞ、美味しそうな海ソウメン　（藤谷の海岸にて）

５月の中旬、大潮の際、子供と一緒に磯ウォッチングと洒落込んだ。久しぶりに子供と磯の生き物を探していると、子供が何やら見つけた様子、行ってみると、カップヌードルの麺が岩の上に一玉のっているではないか。これは珍しいと持っていたカメラで撮影し、帰って図鑑で調べてみると「海ソウメン」とのこと、まさに黄色いソウメンなるほどと思ってよくよく見ると、アメフラシの卵と書いてある、アメフラシも最近ではあまり見られなくなった。昔は突付いてよく遊んだものだ。海や山でしか遊ぶことを知らなかった昔が懐かしく感じられた。（T・M）

バードウォッチングとの出会い　　山　田　次　郎

今から振り返ってみると、犬を散歩さすため毎日三山へ行っているうちに、タカ（サシバ）が定期的（春と秋）に弓削に飛来し、１０日前後留まっていることを知り、それ以降興味を覚え意識的に鳥達を見るようになった。少しでも大きくと、スコープを買い込み鳥達を観察してみると、弓削島にはいないと思っていた鳥、野鳥図鑑でしか見たことのない鳥等、身近で観察することができるようになった。



この恵まれた自然環境に対し、まだまだ捨てたものじゃないと嬉しく思っていた。そんなとき、公民館主催の「バードウォッチングをはじめよう」に参加し、滝田さんと出会い野鳥の観察の仕方等を教わってからは、ほとんど毎日決まった時刻（7:30～8:30）、決まった場所（引野～三山）でその日見た鳥の種類を観察記録し、一年を通じて何種類もの野鳥が観察できることを知り驚いたものだ。四季折々、どの場所で、どの鳥が観察できるか大体わかってくると、この季節、浜に行けばコチドリ、山（三山）に行けばオオルリ、キビタキ等が現れるかもしれないと分かってくる。但し、偶然という作用が非常に

大きく左右することは確かだ。その場所に行けば必ず見ることができるというものではないのも現実である。盆を過ぎた頃から近くの高い山の上空を、気をつけて見ていると、サシバが舞っているのを見ることができるかもしれない。以前は夕方、三石林道でサシバが数羽別々ではあるが、松の枝等に留まっているのをよく目にしたが（十日間くらい)、三山の山頂への道ができてからは、そのような光景は見られなくなった。鳥たちにとっても棲みにくい環境になりつつあるようだ。

暗闇で妖しく光るヒメボタル　　（三山にて）

今年も５月下旬から６月にかけて、三山のあちこちでヒメボタルが現れた。昨年の豪雨の影響を受けたのか、例年より少なめだったような気がした。このヒメボタルは飛ぶ力が弱く、移動力にかけている。そのため開発などによって生息環境が破壊されても逃げ出すことができず、そのまま絶滅してしまう虞があるとのこと。ヒメボタルも良好な自然環境が残ることを示す自然指標になっている。(T・M)

＊観察記録等の投稿のお願い

（自然観察に関する原稿、たとえば、植物に関する原稿、海の生き物に関するもの等何でもかまいませんのでお寄せください)

連絡先：弓削野鳥の会事務局（村上尚）７７－３６０７まで